



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2006, No. 20

【役員名簿 (2004-2006)】

代表: 生田省悟 (金沢大学)
 副代表: 高橋 勤 (九州大学)
 顧問: 秋山 健、上遠恵子
 事務局長: 結城正美 (金沢大学)
 事務局補佐: 茅野佳子 (明星大学)
 喜納育江 (琉球大学)
 会計: 横田由理 (広島大学(非))
 辻 和彦 (福井大学)
 監事: 西村頼男 (阪南大学)
 ニュースレター編集委員:
 小谷一明 (県立新潟女子
 短期大学)
 上岡克己 (高知大学)
 山城 新 (琉球大学)
 会誌編集委員:
 木下 卓 (愛媛大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 野田研一 (立教大学)
 パトリシア・ライオンズ
 (愛媛大学)
 山里勝己 (琉球大学)
 コンピューターセンター:
 岩政伸治 (白百合女子大学)
 北国伸隆 (菽光塩学院)
 山城 新
 評議員:
 ブルース・アレン (順天堂大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 伊藤詔子 (広島大学)
 小田友弥 (松山大学)
 関口敬二 (大阪府立大学)
 高田賢一 (青山学院大学)
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 中村邦生 (大東文化大学)
 村上清敏 (金沢大学)
 吉田美津 (松山大学)
 吉崎邦子 (福岡女子大学)
 研究助成:
 稲本 正 (オークヴィレッジ)
 岡島成行 (日本環境
 フォーラム)
 生田省悟 (代表)
 高橋 勤 (副代表)

かく ま 角 間 の 里 か ら

代表 生田省悟 (金沢大学)

■ 5月の連休後半に所用で帰省したおり、実に久しぶりに阿賀野川右岸の河口から8、9キロほど上流の地点を歩いてみた。旧地名は新潟県北蒲原郡岡方村、その後町村合併により豊栄市、そして昨年からは新潟市に組み込まれた場所である。生まれてから7年余りを過ごした、わが故郷。数キロ下った兩岸の集落は新潟水俣病発生域でもある。

ご存じのとおり、水俣病が去る5月1日で公式確認50年を迎えた。4月から5月にかけては各種メディアで特集が組まれたし、メーリングリストでも流してもらったように、4月29日には「水俣病—新たな50年のために—」と題するフォーラムも東京で開催された(会員数名が参加されたと聞き及んでいる)。別にこうしたことに触発された訳ではないが、今年度の学部ゼミでは水俣病を取り上げている。公害被害について、「法や政策では掬いきれない／救いきれない要素が存在することを把握し、それに対処するには何を考えなければならないのか」というやっかいなテーマをめぐって、学生ともども悩んでみようというのである。当然ながら、ゼミ紹介のうちに学生から「なぜ今、水俣病なのか」と質問された。そこで「水俣病が提起した問題は終わっていない。公害・環境問題の原点として、社会正義・環境の公正を云々」に加え、個人的な想いをあれこれ述べたところ、相手は法学部生だけに前者には敏感に反応してくれるが、後者に対しては狐につままれたような顔をしている。無理もないと思うと同時に、これからじっくり時間をかけて説明し、理解を共有してゆきたいところでもある。そのためにはまず、「わが想い」の原点を再確認しなければならない。故郷再訪にはそんな理由もあった。

河川敷を含めると川幅が1キロ近くにもなる大河。ぼつねんとたたずんでいるうち、眼前の光景と絡み合いながら、はるか昔の色々な記憶が鮮明に蘇ってくる(いまどきの風潮からすれば、「チビだけで川遊びするなんて危ない」と一喝されること請け合いだが)。歩いて渉れる中州で餌なしの空針をクイクイツと引くと飛びついてきたハゼ、農業用水の取水口の壁にびっしり張りついたスジエビ、その壁と田柱の隙間に手を突っ込んだときのヌルツとした魚の感触、柳の枝でやったチャンバラごっこ、土手に咲くマンネングサ(?)の黄色い花。それに「阿賀の水で死水を取る」という、子供心に恐ろしくてならなかった両親の会話まで。どれもこれも川にまつわるものばかりだ。そして、新潟水俣病発生の公式発表。たしか高校生のときだったが、「故郷が壊れた」との感覚は決して忘れよう

がない。その後、大学生になってから1度だけ新潟地裁で裁判を傍聴したこと、石牟礼道子『苦海浄土』を知ったこともあって、「崩壊の感覚」が頭のどこかに脅迫観念のようにこびりついてしまっているのかもしれない。いずれにしても、過去の災禍とは無縁であるかのようなゆったりとした水の流りに接すると、私の関心領域とささやかな仕事の根源が、阿賀野川に生まれた幼い暮らしとその「崩壊の感覚」にあったと妙に納得できるのである。

■ さて、学会発足当初からの懸案であった日本および東アジアからの研究発信がようやく緒についてのご報告したい。日韓 ASLE による合同シンポジウムの第1回が2007年夏に金沢で開催されることが確定したのを受け、現在、実行委員会を中心に作業を進めていただいている。また、素晴らしいゲスト・スピーカーの招聘案も進行中である。このシンポジウムのキー・コンセプトは「場所・自然・言葉—日韓環境文学の(いま)を考える—」。個人的には、「場所が孕む歴史性によって紡ぎ出される固有の言葉」に関心があるのだが、いずれにしても西欧化、ひいてはグローバル化の波にもまれる両国の環境文学(研究)の現状を、近代の歴史をも踏まえながら徹底的に話し合うこと、そして、その営為を継続する過程で成果を世界に発信することの意義は限りなく大きい。暑い金沢の8月をはるかにしのぐ熱い議論が繰り広げられるよう、心から期待している。さらに、今後は日韓が交互に主催し、他の国の ASLE にも参加を呼びかけることも計画されている。近く、金沢シンポにおける研究発表等の募集が行なわれるが、こぞって応募していただきたい。機会あるごとに強調されてきたように、各国との連携は ASLE-Japan の存在意義と密接に関わるものである以上、全会員が積極的に取り組んでゆく必要がある。沖縄国際シンポに引き続き、金沢シンポをそのための確実な歩みと位置づけていただきたい。

■ そして、この9月に仙台で開催される全国大会。こちらは実行委員長を中心にプログラム確定段階であるが、会員諸氏の参加と協力を重ねて願います。いうまでもなく、私たちが年に一度集い、日頃の成果に耳を傾けたり、情報交換をしたりすると同時に親しく語り合うための、またとない機会だからである。しかも今回は、「文学・環境学会」の名にいかにもふさわしい、環境活動や環境教育をめぐる研究発表なども企画されている。私たちの視野を広げ、新たな可能性を示唆してくれるような大会に出席できることが待ち遠しくてならない。とにもかくにも ASLE-J のさらなる発展を願うとともに、杜の都仙台で皆さんと再会できることを心から楽しみにしている。萩が盛りの頃だろうと思いつつ。■

↓↓↓ フランスの山岳文学 ↓↓↓

田中 恒寿 (札幌大学)

フランスの山岳文学といえ、まずはジャン=ジャック・ルソーあたりから始めるのが妥当だろうか。確かにルソーはアルピニストとはいえない。当時の文化的知識人としては当然のことだが、彼もいわゆるスポーツマンとは程遠いのだ。しかし、登山史上ルソーの目に見えない貢献度ははかり知れないものがある。

ヨーロッパの最高峰モンブランが医師ミシェル=ガブリエル・パカールと地元のガイド(もちろん職業的なそれではない。水晶採りを生業としていた)ジャック・バルマによって初めて登頂されたのが1786年。その後、アルピニズムの黄金時代が始まるわけだが、日本と違ってヨーロッパでは、そもそも山という空間が日常生活とはかけ離れたところにあった。この点で、山岳信仰などをはじめとして山との付き合いが長くて深い日本とは、大きく事情を異にする。地上の醜い瘤として嫌悪され、魑魅魍魎の住処として怖れられていた山を、遊び半分に登ってやろうなどと考える物好きがそもそもいなかったということだ。

ところが十八世紀、様相が一変する。荒涼殺伐とした山岳風景を、美しいものとして受け止める感受性の一大変革が起こったのだ。山岳景観に関する審美観がこのように百八十度転換した理由としては様々なもの(科学的な精神の発達、宗教との分離、ブルジョワジーによる余暇の利用、等々)が考えられるだろうが、中でもルソーのものした書簡体長編恋愛小説にして18世紀フランス最大のベストセラー『新エロイズ』(1761年)の影響力を看過することはできない。現代の感覚ではあまりに甘ったるくて冗長なラブストーリーではあるが、当時は熱狂的な読者を獲得し、サン=ブルーとジュリのカップルが愛でたアルプスの風景を自分でも一目見ようと、ヨン様詣でならぬルソー詣で、つまりはアルプス詣でが大ブームとなる。以後、イギリス貴族のグラントツアーでもアルプス周遊は定番メニューとして不動の地位を獲得するに至った。

このような背景があつてこそ、はじめてヨーロッパアルプスが、登山という遊び心の対象として人々の視野に入ってくるのであ

る。ルソーを登山史上の功労者として推すのは、あながち文学最層のこじつけではない。

ちなみに桑原武夫は山岳文学を「攀じる」「歩き回る」「遙かに眺める」の三点から分類している。第一の категорияのラインナップとしては、ガストン・レヴィュファ、モーリス・エルズグ、エミール・ジャヴェルなど、登山のプロないしはセミプロの手による記録文学、紀行文学といったジャンルがこれにあたる。

一方、ルソーはアルピニストではなかったが歩く方は達人だった。歩行は登山の重要な契機であると同時に、山岳にとどまらない広い世界を認識する手段ともなる。歩くことを通じて五感を開放し、自然の新しい見方・感じ方を獲得した経験を表現することが、第二の categoria の眼目だろう。

山を「眺める」文学の範疇は、一般には山が舞台装置ないしは背景として描かれているものと解することができるだろう。その他、登山の文脈に乗っている場合は、思索・随想のウェイトが高くなる。前二者とは対照的に、身体性を捨象することによりかえって想像の翼をはばたかせ、あるいは自己の深部にまで降りていく。岳人はすべからず反芻動物であるというが、自分の登山体験を回顧的に反芻することは、アルピニストに共通した性癖であり、この意味で第三の categoria は最初のものと同底する。

時事的な話題に移ろう。すでに旧聞に属する事柄かもしれないが、ジョルジュ・サンド(1804~76)は2年前に生誕200周年を迎え、フランスでも日本でも華々しい出版事業が相次いだ。そんな中コレット・コスニエ『ジョルジュ・サンドの四つの山』(ゲラン社2004年)は山に焦点を絞ったアプローチとして目をひいた。

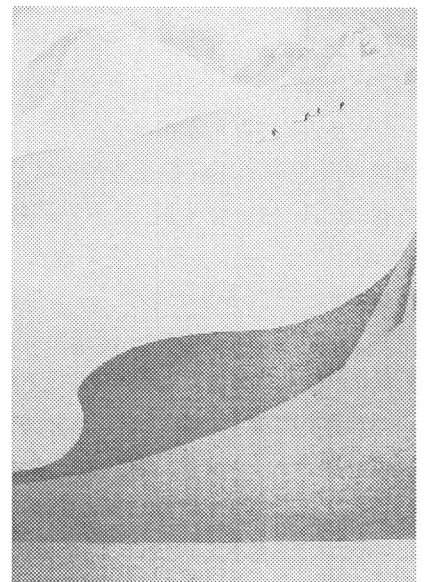
ミュッセやショパンとの恋愛でも有名なサンドは、進取の気性に富み行動力のある女性だったが、そのパイオニア精神は山に関しても例外ではなく、1874年の創立当初からフランス山岳会の会員だった。イギリスほどではないにしてももちろんこの時代、山はバリバリの男性社会である。もう年も年だし、入会の二年後には他界してしまうわけだから、山岳会員としての活動などに等しいものだったに違いないが、若かりし頃(三十代)のジョルジュ・サンドはシンプロン峠を徒歩で越えたり、シャモニに通ったりと、なかなかの健脚ぶりを発揮している。厚手のズボンにハンチング、青の作業服といういでたちは、男装によってパリで物議をかもしたジョルジュ・サンドであるなら驚くにはあたらないだろうが、山岳地方を歩いて旅するには、パフォーマンスというより実用的なメリットの方が大きかったに違いない。もちろん男装によってジョルジュ・サンドが獲得した精神の自由は、山という領域を新たに開拓しようとする当時のヨーロッパの人々があわせ持っていた精神の自由さと共通するものであることはいまでもない。

続いてロジェ・フリゾン=ロッシュ(1906~1999)に移ろう。代表作はいわずと知れた青春山岳小説の傑作『ザイルのトップ』(1941年)だが、他にも『大クレバス』(または『青春の氷河』1948年)、『山に還る』(1957年)といった邦訳で親しまれている作家だ。

両親ともサヴォワの血筋だが、生まれたのはパリ。山に惹かれて17歳でシャモニに移り住み、登山の才能を開花させる。1930年、24歳で晴れてシャモニ・ガイド組合の山岳ガイドとして認められたが、彼のノマド気質は世界をまたにかけた探検の旅へとロッシュを駆り立てる。1935年から38年まで、サハラを渡り歩き、第二次大戦中は従軍記者としてチュニジアへ赴いた。戦争が終って一旦フランスに帰国するが、50年代から60年代にかけて再び北アフリカへ、さらにはラップランドをはじめとする北極圏へと探検行を繰り返している。

今年はロジェ・フリゾン=ロッシュの生誕百年にあたるが、雑誌の特集などを除き、これといって大きな催しはないようだ。というのも、没後まもなく(2001年)シャモニで“ザイルのトップの軌跡”と題された回顧展が開かれており、それからまだあまり時間がたっていないからだろう。

最後にサミヴェル(1907~92)のことも触れておくことにしよう。本名はポール・ゲイエ=タンクレッド。サミヴェルの名はデ



イクエンズの『ピクウィック・ペーパーズ』に登場するウィットに富んだ陽気な下僕サム・ウェラーにちなんだものだというから、サミヴェルの毛並みのほども察しがつくだろう。日本での知名度はあまり高くないが、イラストレーターとして、作家として、本国では根強いファンを持っている。味のある画風といい、ユーモアのセンスをそなえた独特の文章といい、さしずめフランスのじまことと言ったところだろうか。1940年に出版された『深淵愛好者』は今まで何度も版を重ねられている(残念ながら邦訳はない)。登山の技量もさることながら、1948年にはポール=エミール・ヴィクトール率いるグリーンランド探検隊に同行してドキュメンタリー映画を作るなど、実に多彩な人ではある。1967年の『エデンベルクの狂人』ではゴンクール賞にもノミネートされた。

そして我々が忘れてはならないのが、自然保護活動家としての顔であろう。早くから自然保護の重要性を認識していたサミヴェルはフランス初の国立公園となるヴァノワーズ国立公園の設立(1963年)にむけて尽力し、“サミヴェルの掟”をものした。「国立公園は万人のものである自然の富と美を無知と蛮行から守るものである。生命を慈しむすべての者は国立公園の友である。すべての進歩と平和の友は国立公園の友である。すべてのスポーツ愛好者、芸術家、知識人は国立公園の友である」で始まるこの憲章には、自然と自由を愛するサミヴェルの気概がよく表れているといえるだろう。

来る2007年、“サミヴェルの友”協会がスイスはローヌの谷間、ダン・デュ・ミディの麓に位置するサン・モリスで回顧展を開催するというから楽しみだ。■

金沢発・「ウェンデル・ベリー輪読会」

田中 純一

(金沢大学大学院社会環境科学研究科3年)

【はじめに:なぜベリー輪読会なのか】

2006年1月より金沢市でウェンデル・ベリー輪読会を開催しています。2週間に1回というゆっくりとしたペースで実施しているこの輪読会も、この5月には10回目を迎え、いよいよ終盤へと突入しました。輪読会開催のきっかけは、第1に環境NGO活動などを通じ、個人的に身近な存在である北陸大学の三国千秋先生が、ウェンデル・ベリーの著書を翻訳・出版されたことにあります。個人的には、環境NGO活動を通じて知り合ったオーストラリアの環境NGOメンバーを通じて以前からベリーの名前は耳にしていました。欧米では環境問題に関心を持つ人たちの間にも強い支持者のいるベリーですが、日本の一般市民の中での知名度は決して高くありません。その理由はベリー自身の著作は数多くあるにもかかわらず、日本語翻訳が出回っていないからです。しかし、今回三国氏が翻訳してくれたことで、気軽にベリーの著書に触れられることになりました。

翻訳書が出ると同時に一読しました。中身は一般市民が読む場合、決して容易とは言えません。しかしながらその内容は大変奥深く、意義のあるものです。環境保全活動やまちづくりなどさまざまな市民活動をしている人たちと一緒に読みながら地域社会や自然と人間の関係などについて、ベリーの考えを「酒の肴」に議論しあうのは刺激的な

ものになるのではと考えたのです。これが第2の理由です。

企画を打診する中で翻訳者である三国氏にも参加を依頼しました。訳者を囲んで読めば、分からない箇所について質問できるし、なにより楽しいと考えたからです(その一方で訳者である三国氏は、参加者の感想や意見が大変参考になると言っています)。三国氏から企画参加快諾の返事をもらい、輪読会はスタートしました。

輪読会開催場所として選んだのは金沢市民の台所として有名な近江町市場一角にあるライブハウス「メロメロポッチ」。「輪読会」と「ライブハウス」の組み合わせというミスマッチさは個人的にかなり気に入っています。ところでこの「メロメロポッチ」、地元ではちよつとした有名スポットですが、一言で説明するのがとても難しい空間です。昼はジュース屋、夜はライブハウスですが、あるときはブラネタリウム、あるときは若手芸術家の展覧会会場、またあるときは演劇ステージといった具合に、型破りな企画を次々と開催している空間です。そんな場所ですから、連日多くのミュージシャン、芸術家、若者たちが集まり、「市民サロン」さながらに政治、芸術・文化、社会問題などの話題が飛び交っています。そんな空間ですから、こうした輪読会が行われることに不自然さはないのです。

輪読会の参加者は、会社員、公務員、デザイナー、教員、主婦、学生など職業、年齢層は実に多彩です。輪読会の良さの一つに他者の捉え方を直接耳にすることで、その場で新たな気づきにつながる点があります。仕事やプライベートの活動、あるいは研究活動を通じて自然環境や

まちづくり、開発問題などに関心を持ち、日頃から関心領域について考えている人が多いせいか、話題提供者のコメントに触発されて、想定外の展開になることがよくあります。ベリーの話よりもこちらの方が盛り上がってしまうことがあり、呼びかけ人としては「軌道修正したい、でもおもしろい」と、苦しい立場に立たされることがよくあります。



参加者にとってなにより有益なのは、三国氏が毎回準備してくれるリプライ・レポートです。これは参加する人のみが得られる大きな特典で、参加者にとっては貴重なお宝です。レポートは、前回の報告者による報告とコメントおよび会場での議論を受けて、三国氏がまとめてきてくれるものです。ややアカデミックな形式でまとめあげられるため、参加者にとって内容が容易とはいえません。ですが、ポイントを整理し、深く論考してあるため、ベリーの著書の更に深い理解を可能にしてくれます。一人で読んでいるよりも、みんなで読み返して意見を交わすと理解できる。さらにリプライ・レポートを読むことで、ベリーが言わんとするところにかかなり近づけるようになっていきます。

【生命とは何か】

ここで著書の中身について若干触れることにします。『ライフ・イズ・ミラクル』の中心的概念は「生命(ライフ)」です。本書を通じて、ベリーは生命を環境・科学技術・宗教・芸術に関連させながら論考していますが、特に科学技術に関する見解には多くの紙面を割いています。このことは科学技術や科学技術を後押しする還元主義的発想が、われわれの行動基準に及ぼす影響が非常に大きいことと関係しています。そして、ベリーはわれわれが「基準と目標を変えること」を提案しています。それは、科学技術の能力を出発点とする「基準」や「目標」ではなく、「それぞれの場所やコミュニティのあり方を出発点」とする基準と目標の変更

という要請です。

こうした流れの中、ベリーの関心は「適切さ(propriety)」というタームにも向けられます。この「適切さ」を考える上で重要な視点は「われわれの行動を場所やまわりの状況にいかにかふわさしいものにするか」です。ここでベリーがいう「まわり」には、他者としての人間だけでなく、自分を取り囲む生命すべてが含まれています。そしてわれわれはこの「まわり」から影響を受けると同時に、影響を及ぼしていることに注意深くなる必要があるのです。

そしてベリーは「適切さ」についての答えの拠り所として「小さな地域」を挙げています。ここでいう小さな地域がどの程度の規模を指すかについて、ベリーは具体的に述べてはいませんが、文脈から地理的領域の小さな地域、文化的集団を意識していると思います。またベリーは文化的手段の意義についても述べています。文化的手段が不完全な知識が「放漫で危険な振る舞いに陥らないように、われわれを自制するための基盤となる」(p.13)のだと述べています。

このように述べると、ローカルな地域社会をイメージしがちですが、ベリーが志向するのは人間の都合で規定した行政区や学区などといった狭い枠組としての地域社会ではなく、人間以外の生物をも地域社会の枠組に入れた適切な「基準」と「目標」によるところの「小さな地域」なのです。しかしながら、同書の中では、「小さな地域」の基準と目標が明確には示されていないため、こうした提案は、ローカリティの意義を推し進める結果、筆者の意図を外れ、かつての共同体的なあり方を無批判に評価する流れや、あるいは自分たちが所属する地域のみに関心が向けられる結果として、他の地域や「われわれ」の外にいる他者(他の生命)を排除することになる可能性につながる危険性を含んでいます。ただ、こうした方向性がベリーの「小さな地域」と相容れないことは容易に想像が付きまします。この点はベリーが宗教や文化的伝統を通じ解釈している生命観からも理解できます。ベリーに拠れば、生命とは次のようなものです。すなわち、生命はわれわれの理解を超えたものであり、生命を持つ生き物は単独では生きられないのであり、生き物は環境の中だけでなく、環境それ自身を構成するものであり、生き物の生命とは「その生き物が置かれた場所で、その生命によって生ずるすべてのこと(p.50)」なのです。

現代社会においては、意識するにせよ無意識であるにせよ多くの人がグローバル化の影響下の中で日々

の暮らしを営んでいます。それは言い換えるなら、われわれが知らず知らずのうちに他者や他の地域、他の生命に対して影響を受け、影響を与えているということです。このように、われわれが常に「まわり」から影響を受け、影響を与えていることを認識するとともに、こうした認識を他者のみならずあらゆる生命に及ぼせることによって「小さな地域」の意味が見えてくるのだと思うのです。



本書の中でベリーは「適切さ」について、それが個人主義に対立するものであると述べていますが、グローバリゼーションと個人主義を無視して今日を語ることはおよそ困難です。その意味では、グローバリゼーションの中で、

【報告】

EASLCE (European Association for the Study of Literature, Culture and Environment) 2006 年大会参加報告

山城 新 (琉球大学)

2006 年 4 月 28 日から 5 月 1 日の日程で欧州オーストリアのクラゲンフルト (Klagenfurt) で European Association for the Study of Literature, Culture and Environment の年次大会(以下 EASLCE 大会)が開催された。開催地となったクラゲンフルトはケルンテン州の中にあり、ウィーンから南へ列車 300 キロ程下ったところである。イタリアとスロヴェニアの国境沿いであり、夏場には多くの観光客が訪れる避暑地であるそうだ。

今回の統一テーマは「水：文学的、文化的、環境的視点から」(“Water: Literary, Cultural and Environmental Perspectives”)。今回第二回目を数える本学会の大会では、およそ 30 カ国からの 70 人ほどの発表者が

他者や他の生命が持つ自由や関係性の中での持続可能性を奪わない個人の立場というものが求められると言えるでしょう。そのときその土地に脈々と引き継がれる文化的手段は、他者や他の生命との関係性を含んだ「小さな地域」と小さな地域に生きる個人の立場を考える上で重要なヒントを与えてくれます。それは決して、他者や他の生命を排除するようなものではありません。

【さいごに】

『ライフ・イズ・ミラクル』は地域づくりを考える上で示唆に富んだ内容になっています。訳者である三国氏が身近にいて、われわれはかなり深く議論することが可能となっていますが、数人集まれば、かなり熱い議論になることは間違いありません。本書が「小さな地域」を志向していることから、研究者と一般市民が「生活者」という枠組でいっしょになって意見を出し合うなかから「小さな地域」のあり方がみえてくると思います。■

おり、全体の参加者は 120 名ほどであった。学会初日の基調講演ではドイツ・フランクフルトより Thomas Kluge 氏 (Institute for Social-Ecological Development) が近代都市への水供給技術の歴史は、水に対する人間中心の態度からより自然環境に配慮した態度へと転換する歴史であったということ、科学的、建設学的、あるいは歴史的な様々な資料を駆使して説明した。しばしば環境思想史でも人間中心主義から非人間中心主義への移行は様々に説明されるが、都市建設計画の観点から文化と歴史を再考する試みは新鮮で、ある意味でこの学会を象徴するような講演であったように思う。以下個別発表と学会の様子などをかいつまんで報告する。

研究発表初日のワークショップは「国際的視点からの水の表象」というテーマで日本から山城新 (琉球大学)、オーストラリアのメルボルンから Nonie Sharp 氏、リトアニアから Irena Ragaisiene 氏がそれぞれ発表した。山城の発表は海中体験が表現される際の特徴について、ジャック＝イブ・クストー、ウィリアム・ビービヤシルヴィア・アールらの作品をとおして説明した。まず、視覚的美しさが驚きを持って表現され、圧力や酸素や

海水が身体へ及ぼす物理的影響が極めて異質な体験として表現され、そして語り手はその異質さを表現しようともがく—そのようにして海中世界の物理的・視覚的異質さが身体体験をとおして表現されることが海中体験を表現する作品にみられるとした。

Sharp 氏は自身の創作の朗読を主体にした発表であったが、合間にイギリスの代表的詩人のシェリーやコールリッジの詩の解釈を絡めつつ、海の風景がどのような科学的、文学的、そして文化的な要素によって構成されているかを語った。時に Jesper Cropsey の雲に関する研究論考に依拠しながら科学的な考察も含める発表は、最近米国の ASLE 大会でも頻繁に実践される、科学的ディスコースと個人的体験を折衷させた研究スタイルを想起させた。

Ragaisiene 氏の発表はシルビア・プラスの詩とリトアニア出身の代表的詩人 Jolita Skabliauskaite の詩を比較研究するものであった。水の純粋さは「純粋」や「無垢」なものの表象として用いられ、濁った水のイメージは精神分析的解釈を社会的・生態学的文脈に応用して「汚される社会環境」として見ることもできるとする。そしてこのような水の表象は米国詩人にもそしてリトアニア詩人の両方に観ることができると分析した。

二日目の研究発表で興味深かったのは「ドイツ文学における水の表象」であった。発表者は Wendy Skinner (Georg-August-Universität Göttingen, Germany), Uwe Seja (University of Cambridge, UK), そして Axel Goodbody (University of Bath, UK)。Skinner 氏は北海に注ぐエルベ川をめぐる自然災害についてドイツ詩人たちがどのように表現してきたかを説明した。自然災害は物理的にも心理的にも破壊的な影響力を持つ。詩は芸術の一形式である以上、当然ながら審美的価値観とは不可分である。だとすればエルベ川を表現してきた詩人はその相反する破壊的・審美的要素をどのように詩的表現に組み入れたのかという点を主題として、詩的技法や思想的背景について論じた。

Seja 氏は経済学と文学の両方で学位を持つ研究者で、発表もその学際的専門知識を基にするものであった。テオドル・シュトルムの作品 *Kunstmärchen Die Regentrude* の中に 19 世紀ドイツの経済理論がどのように影響しているかを論じた。ヴィルヘルム・ロッシャー (Wilhelm Roscher) らのドイツ歴史学派の影響

が色濃く反映されているとし、シュトルムの作品においては文化的・歴史的な価値観が、個人主義的・合理主義的価値観よりも優位に描かれていることから、当時台頭してきた近代資本主義に対して懐疑的であったシュトルムの批判的態度がそこに現れていると分析し、同時にそれはドイツ歴史学派の思想的影響によるものであると主張した。

Goodbody 氏は英国 ASLE において主要なメンバーであるだけでなく今大会まで EASCLC 代表を務めた方である。同氏の発表は 20 世紀後期のドイツ文学において人魚の描かれる作品をいくつか紹介しつつ通時的に人魚の表象について考察した。その表象の多くは思想的にロマンティシズムに起源を持ち、技法的にはその流れに加えてパストラリズム的な女性の構築あるいは脱構築が観られるとし、人魚の曖昧な存在性は現代にも息づく重要なテーマであると主張した。

その他の発表については紙幅の関係上、省かざるを得ないのが残念だが、今回の学会の研究発表の特徴として（個人的な印象では）、まず、EASCLC という学会の名称の中で文化と文学と環境が並記されているように、文化批評的考察が多かったということとである。もう一つは米国環境文学研究を参考としながらも欧州的な研究の在り方を多文化的アプローチによって模索している様子が見られたことである。例えば、アメリカ作家や作品をエコクリティシズム的に分析し、それを各自国の作家らのテーマや表現技法と比較対照させ、共通点や相違点について分析するといった具合である。

研究発表の他には、米国からはフェミニズムの観点から米国環境史と環境思想を分析するベラ・ノーウッド (Vera Norwood, University of New Mexico) の講演があり、その他にアイルランド・ダブリン出身の詩人ローズマリー・ローランズ (Rosemarie Rowlands) の脱構築したフェミニズムの詩の朗読、ディストピアを描いた 2004 年のベストセラー *The Flood* で知られるイギリスの小説家マギー・ジー (Maggie Gee)、イギリス・タイムズ誌記者で 2004 年のベストセラー *The Stream* で知られるブライアン・クラーク (Brian Clarke) らの朗読があった。何より印象深かったのは各朗読においても観衆との対話が多く交わされ、招待作家たちが学会中も各研究発表に足を運び、積極的に意見交換している様子が散見されたことであった。研究発表者以外の参加者も、例えば、はるばるスウェーデンから

キャンプしながら自動車で学会に足を運んでいた環境教育に携わる青年や、フランスやスペインで環境文学の学位を目指している博士課程の学生たち、あるいは訝しい表情だが興味津々に「おもしろそう」と研究発表に顔を出す地元の学生、南アフリカから参加している環境ジャーナリストなど、世代も肩書きも実に多様な人たちが参加していただけではなく、皆が自由に対話できる雰囲気があって、そして実際に活発に議論

や意見交換がなされたことである。学会の様子については EASLCE 学会ウェブページにも書かれているはずなので詳細についてはそこで参照されたい。

[<http://www.bath.ac.uk/esml/easlce/index.htm>] 次回は2年後で開催地はイタリアのトリノが予定だということである。日本からも多くの参加者を期待したい。■

中国環境文学研究の広がり

田渕 人司 (sainbainau@hotmail.com)

中国の環境文学については、いままで日本でもいくつかの紹介がなされてきた。早くは(財)地球・人間環境フォーラムの月刊誌「グローバルネット」1995年3月号に楊矛が「緑の文明を広げるため自ら種をまく中国の作家たち」と題する小文を寄せている。その後、NGOの協力による草の根の環境資料集として名高い『アジア環境白書』では、中国の急激な経済発展の影で進む環境破壊に警鐘を鳴らす徐剛らの文学作品が紹介された。2001年には環境文学をテーマとした柴田陽弘編『自然と文学——環境論の視座から』(慶應大学出版会)という単行本があらわれ、そこに杉野元子「現代中国の環境文学」、関根謙「異端と自然——中国人作家の眼差し」という2つの論文が収録された。これらによって私たちは、古来、中国思想の「天人合一」の自然観のもとに展開してきた中国文学の土台の上に、80年代から環境破壊に憂慮を表明する「環境文学」が中国でさかんに書かれるようになったこと、「緑葉」という環境文学専門誌が鳴り物入りで発刊されるも、その後の商業主義の蔓延する社会状況の中で徐々にその性質を変えていったこと、中国環境文学の代表作や作家など、中国環境文学のおおまかなアウトラインを知ることができた。2004年には、私も中国研究所編『中国年鑑 2004』(創土社)に「文学からみた砂漠化」と題して中国・内モンゴルのモンゴル人作家たちの環境文学について短文を書いた。

しかし、その一方で近年、英米文学の研究者らがエコクリティシズムなどの欧米の環境文学研究を受容し中国に紹介、あるいは中国文学に援用しようという試みもさかんに行われ、百花繚乱の様相を呈してきたことについては、まだあまり知られていないようである。そこでここでは中国の環境文学研究のキーパーソンと思われる研究者3名をとりあげ、簡単に紹介してみることとする。

(1) 魯枢元

文学理論研究者で海南大学教授の魯枢元は中国でもっとも早い時期からエコ・クリティシズム(生態文芸学批評)を提唱してきた研究者の一人で、2000年にはすでに『生態文芸学』という単著を発表、欧米の環境文学理論を受容するだけでなく、陶淵明や王維の詩などにみられる自然回帰や天人合一思想なども視野に入れつつ研究を進めてきた。2002年には『生態批評の知的空間』という論文も発表、また大学での学科創設を提唱するなど精力的に活動している。ちなみに中国で「生態学」とはエコロジーのことをさす。ポストコロニアリズムやフェミニズムなどとの関連も視野に入れつつ、現代社会における弱者からのまなざしを反映するものとしての生態文芸学の確立を目指している。

(2) 王諾

アモイ大学で英米文学を講じる王諾教授は、2000年から2001年にかけてのハーバード大学訪問後、多数エコクリティシズム関連の論文を書き寄ってきたが、2003年にはその集大成ともいべき欧米のエコロジー文学の概説書『歐美生態文学』(北京大学出版社)を上梓し、注目されている。ちなみに中国語で美国とはアメリカのことである。なお、本人は中国語でブログを発表しており、そこで関連の文章も読むことができる。

ブログ・生態文学と王諾 <http://ecowangnuo.blog.sohu.com/>

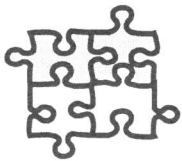
(3) 龍娟

湖南師範大学外国語学院で教鞭をとる若い世代の研究者、龍娟は2005年3月、『環境文学研究』(湖南師範大学出版社)を出版した。同書の序文で龍娟は、環境文学を認識、理解するにはとくに次の3点に注意を払うべきだとしている。第1に環境文学の論理的基点は環境危機にあるということ、第2に環境文学の基本主題は生態環境保護であるということ、第3に環境文学は思想資源のとくに豊富な文学形式の一種であるということ。そして、全体を8章に分け、環境文学とは何かに始まり、その発展過程、成立の時代背景、思想的源流、現実社会に対する批判、人類文明への見直し、エコフェミニズムのまなざし、唱うべき道徳的価値観など広範に環境文学を論じている。

以上みたように、中国では「生態文学」あるいは「生態文芸学」という用語が「環境文学」という用語と同じくらいかそれ以上の割合で用いられ、内容的にもかなり幅広く、深い議論が展開されてきている。2002年に呉艷の書いた論文のように『『エコロジー』は『文学』を顛覆したか? (『生態学』顛覆了“文芸学”?)』といった挑発的なタイトルのものまである。同じ2002年には江漢大学文芸学部の張皓教授が中心となって編纂した「文芸生態探索叢書」(武漢出版社)4部作も出版されている。

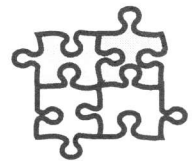
また環境文学に対しては、2003年に「全国環境文学優秀作品賞」が始めて選考され、小説、散文(エッセイ)、ルポルタージュ、詩などを含む22篇の作品が受賞したこともあり、研究者ばかりでなく作家の側から文学論を展開していくという状況もある。また民族語で書かれる文学作品が環境文学として論じられるものもある。例えば内モンゴル最西部のアラシャ盟のドーダガチ・エンヘハダが2003年6月にモンゴル語で出版した『口の水(アマン・オス)』(民族出版社)という散文作品について、生態文学の観点から批評した論文がモンゴル語の文芸批評誌「金の鍵(アルタン・トゥルフール)」2005年度の第1期と第3期に断続的に掲載された外、第6期にはホショーチという作家の作品について同じように批評が掲載された。

このように多様な広がりを見せつつ展開している中国の環境文学研究だが、日本の側からもそのような視点から、もう少し関心を寄せる必要があろう。たとえば沙漠文学の旗手・郭雪波の『砂漠の物語』(福音館書店)のように、中華世界では環境文学の代表作とされているような作品が、日本では児童文学としてしか消費されていないのはいささか心許ない。確かに中国の文学シーンを塗り替えるほどの大きなムーブメントではないにせよ、中国の環境文学研究は、着実にその裾野を広げていっているのだから。■



『銀河鉄道の夜』に隠された自然からのメッセージ

杉浦 嘉雄(日本文理大学 教授)



1. 賢治作品は「自然の翻訳書」

自然と人間の関わりを深く省察する宮沢賢治の作品は日本の代表的「環境文学」である。特に彼の作品は、「自然の翻訳」という観点によって捉えることができる。即ち、賢治作品は、賢治が実際に出会った「自然からのメッセージ」を彼自身が正確に把握し、その内容を可能な限り忠実に表現した「自然の翻訳書」であり、賢治は「自然の翻訳者」と捉え直すことだ。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。

…童話集『注文の多い料理店』の序より

初期童話集に対するこのような賢治の創作精神こそ、「自然の翻訳者」としての彼自身の意志表明と解釈することができる。そして、この精神は後述するように、彼の晩年の作品『銀河鉄道の夜』まで継続されている。

また、このような解釈は、賢治を詩人・童話作家・宗教家・科学者・教育者として捉えてきた従来の研究に対して、「新たな視点」を提供することになる。

そこで以下、『銀河鉄道の夜』を題材にして、このような視点を提供する「新たな方法論」およびその成果の一例を紹介する。

2. 『銀河鉄道の夜』成立までの経緯・背景

宮沢賢治は37才（1896年～1933年）の短い生涯であった。その賢治が26才（1922年）の時、最愛の妹トシに24才の若さで先立たれた。詩作好きの賢治は、それから半年の間、詩を全く書かなかった時期を過ごす。

その後、賢治は翌年7月31日から8月12日まで、当時教員をしていた花巻農学校の教え子の就職を依頼するため、故郷の岩手県花巻から青森、北海道を経てはるばる樺太までの往復の旅をする。しかし、それは同時に亡き妹トシに逢うための“黄泉の方角”である北の果てまで流離う旅でもあった。そして、決死の旅においてもトシに逢えなかった賢治の悲しみは「オホーツク挽歌」詩群として結晶化した。

さて、花巻に戻った賢治は、北上川のほとりで、ある神秘的な光景と出逢うのである。北上川は、特に花巻市内では文字通り、真北から真南に向かってとうとうと流れている。

時は“黄泉の国”の人々と交流することができるお盆（トシの初盆）8月中旬午後8時、所は賢治が「イギリス海岸（ある北上川の岸辺に賢治が命名した。賢治にとって農学校の生徒たちと実習したり遊んだりした懐かしい場もある）」と名付けた北上川の川岸辺り。

既に夕日は沈み濃い鋼青の空には星々が輝く。ふと天を仰ぐと、北からほぼ天頂を通り南に向かって天の川が横たわっている。当時は、街にはネオン光はなく街灯も少ない時代である。北上川のせせらぎには、天の川の微光が映し出されていたにちがいない。

「イギリス海岸」に佇む賢治の眼には、“地上の大河”北上川と“天上の大河”天の川が融合し、そこから新たに出現した“異空間の川”の光景が確と映っていたことであろう。

賢治は、自らの姿を『銀河鉄道の夜』の主人公「ジョバンニ」に投影し、同じく妹トシを「親友のカムパネルラ」に投影して、この“異空間の川”を旅したのではないだろうか。

何れにせよ、この大作の成立には、【図1】に示すような、賢治自身の神秘的な光景との出逢いが不可欠であったにちがいない。（斉藤文一「宮沢賢治 星の図誌」平凡社を参照）

【図1：神秘的な光景と“異空間の川”の出現】

3. 星空に“銀河鉄道の線路”を描く方法論

『銀河鉄道の夜』に登場する天の川周辺の景色や建物などの「描写箇所（以下、描写）」を、このような視点で意識的に眺め洞察していくと、実際の銀河の星々や北上川の数多くの場が「描写」の“原型”となっていることに気づく。

例えば、物語の「プリオシン海岸」の原型は北上川の“イギリス海岸”、「アルビレオの観測所」の原型は夏の銀河に輝く“白鳥座のβ星・アルビレオ”であるように、この物語に登場する「描写」としての風景、建物、時には人物までも“原型”が、両大河の自然や風景の中に探し出されることができるのである。



また、『銀河鉄道の夜』に登場する「描写」に隠された星々の“原型”を拾い出し、物語の順に夏の銀河の上に並べれば、天の川の北から南に走る異空間列車“銀河鉄道の線路”を描くことができるかもしれない。

賢治は無類の星好きであった。星座早見版をしっかりと携え毎晩のように自宅の大屋根で、時には岩手山や小岩井農場など見晴らしのよい大自然の中で星空を眺めていたと言われている。そんな賢治だからこそ、亡き妹シ・天上の星たち・北上川の自然から、賢治に語りかけてきた数多くのメッセージを編みながら、宇宙的規模の物語『銀河鉄道の夜』を創りあげることができたのではないだろうか。

その証拠を見つけるために、賢治の内なる星空への旅を追いながら、さらに具体的に、拙文で展開した“銀河鉄道の線路”を描く作業手順を紹介しよう。

- 1) 最初の検証作業は、銀河鉄道の登場人物や車窓から見えるあらゆる風景の「描写」の背景に実際の星空にある“原型”を見つけ出そうとする段階である。例えば、物語の「向う岸で青じろくぼうっと光ってけむる、やさしい狐火」という描写の中に“小狐座のアレイ星雲”の原型を見つける段階である。この作業をすることで、壮大な物語の「描写」の中から、賢治が実際に眺めた、あるいは憧れた実に数多くの“星座・星雲・星団・星物語”を発掘することができる。
- 2) 次の検証作業は、それらの“原型”が『全天恒星図』に占める正確な位置を、図の中へ正確に落とし込む段階である。
- 3) 第三の検証作業は、それまでの作業で得ることができた数多くの“原型”の位置を、この物語の順に従って連結していく段階である。そこまでを忠実に積み重ねていくと、“銀河鉄道の線路”の骨格が浮かび上がってくる。

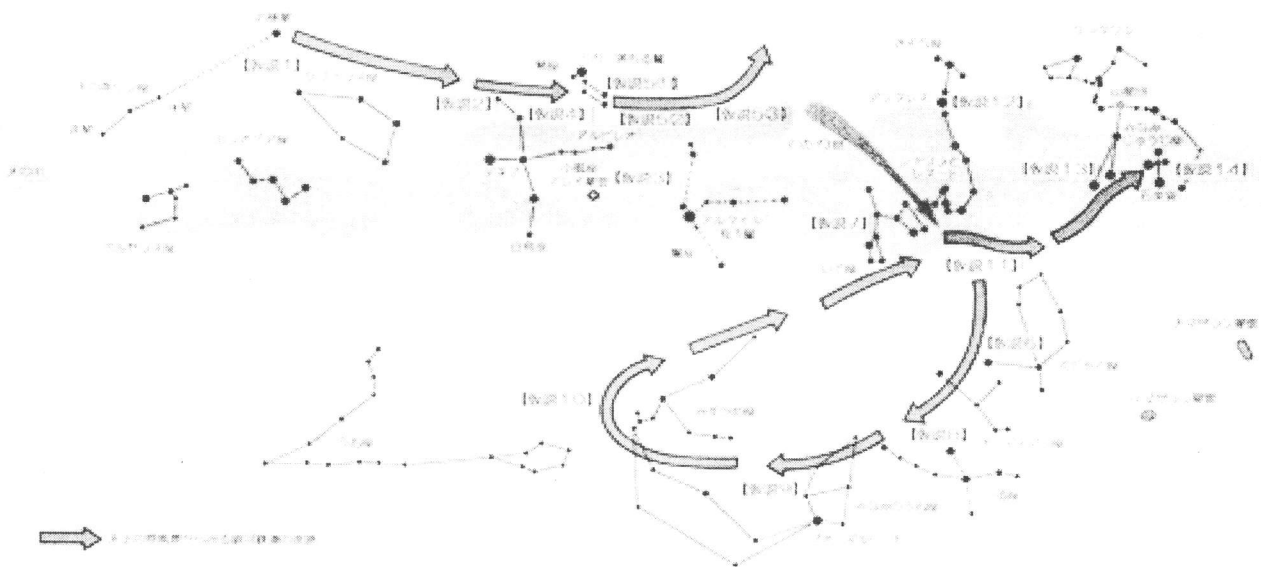
また、「線路」の骨格を補強する作業として、物語の「宇宙時間」にも注目したい。例えば、銀河鉄道が「白鳥の停車場に 11 時かっきりに着く」のはなぜか。8 月中旬(お盆)午後 11 時の実際の星空に問いかけてみれば、賢治が受け取った“秘密のメッセージ”をいとも簡単に教えてもらうことができる。

その夜 11 時に、読者が賢治のように白鳥座を眺めたとしよう。高く舞い飛ぶ“巨大な白鳥の姿”を、読者はちょうど天頂に捉えることができるはずだ。また、同時に、星に思いを寄せた賢治の眼差しや感動も同時に感じ取ることができるのではないだろうか。

このような作業を経て完成した仮説群の図式が【図 2】である。

【図 2：天の川を北から南に走る銀河鉄道】

夏の天の川に“銀河鉄道の線路”を描く



4. 異空間列車と渡り鳥たちの本当の意味

この銀河鉄道を鳥瞰すると、旅の前半では“異空間の川”である「天の川」の左岸を走り、中程で「渡り鳥」とともに「天の川」

を橋のように渡り、後半では右岸をやや変則的に走る全体像が浮かび上がってくる。ここで注目すべきであるのは、その構造が、従来の賢治研究における代表的「銀河鉄道敷設論」の結果とは全く異なっていることである。

代表的敷設論には2つの説がある。「天の川の琴座とは反対側の岸を『左岸』と定義して、終始『左岸』を走り続ける」とする天沢退二郎の説と、「天の川の琴座側の岸を『左岸』と定義して、終始『左岸』を走り続ける」とする畑山博の説である。2つに共通する点は天の川を渡らない構造となっていることだ。確かに、物語の中に「銀河鉄道が渡った」という直接的描写がないために起こる当然の結論ともいえよう。

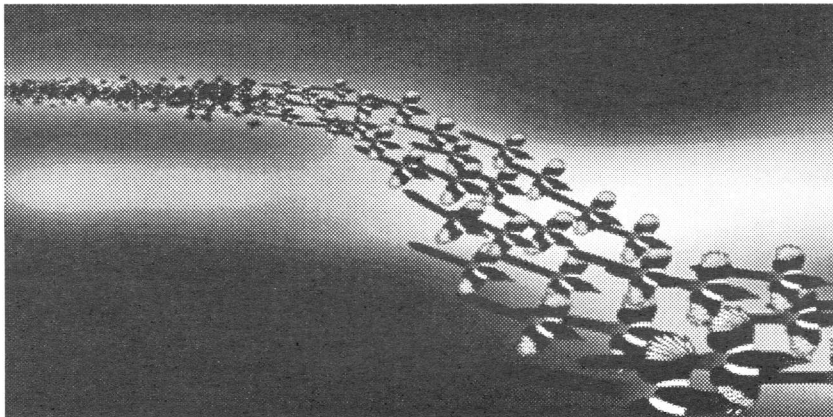
然るに、物語の「描写」に実際の星空にある“原型”を探し出し、それらをつなぐ方法論を忠実に採用すると、どうしても「銀河鉄道が渡る」ことになってしまう。

それは何故であろうか。また、銀河鉄道の線路が「天の川」の左岸から右岸へ渡らなければならなかった現象の背景に、どんな意味が隠されているのだろうか。

謎解きのヒントは、この物語に登場し七夕伝説にも登場する「カササギ」にありそうだ。銀河鉄道の旅も中程を迎える頃、銀河鉄道の車窓からは「天の川」の左岸に数多くとまっているカササギの姿が見えてくる。カササギは、七夕伝説の中で牽牛と織女の悲恋を見るに耐えかね、二人を再会させるべく自らの群が一行に並び架橋の役割を担う鳥である。

物語では、この鳥たちが現れた直後に、銀河鉄道の異空間列車は幾万の渡り鳥とともに、「天の川」の左岸から右岸へとまるで七夕伝説のように渡っていく。賢治は、異空間列車そのものが川を渡る布石として、七夕伝説で大切な役割をするカササギを登場させたのだ。

【図3：此岸から彼岸に渡るカササギの群】



また、物語では、異空間列車がちょうど川を渡り切ったその頃、まるで「彼岸」に到着した証のように、ドヴォルザークの『新世界交響曲』（恐らくは第2楽章「家路」）が流れ始める。さらに、その曲が流れた直後に、もう二度と引き返せない世界であることを示すように「汽車は決して向ふからこっちへは来ないんです。」と老人らしい声も聞こえてくる。

どうやら、同じ銀河鉄道の天上の世界でも「此岸」と「彼岸」があるようだ。多くの

神話と同じく、この物語にも亡くなった人々の魂が渡り鳥となって「此岸」から「彼岸」へ渡っていく構造が読み取れる。

この文脈をたどれば、読者が今まで「人」と思っていた銀河鉄道の多くの搭乗者たちが実は“渡り鳥”が変化した姿であったことに気づく。また、ここから、銀河鉄道の旅で語られたジョバンニたちの物語と並行して、世界中の亡き人たちが搭乗する何千何万という銀河鉄道異空間列車の「彼岸」へ渡っていく物語が繰り広げられていることにまで思いを馳せることができるのである。

これらは確かに仮説の段階ではあるが、賢治晩年の作品『銀河鉄道の夜』においても、天上や地上の自然からのメッセージから生まれた「自然の翻訳書」である可能性を十分に示すことができたのではないであろうか。読者のご意見・ご感想を期待する次第である。■

<参考文献>

- ① 杉浦嘉雄「自然の翻訳書『銀河鉄道の夜』に隠された自然と心の深層を探る(正・続)」(宮沢賢治学会イーハトーブセンター『宮沢賢治研究 Annual』Vol.5 平成7年・Vol.6 平成8年)

- ② 杉浦嘉雄『春と修羅 第二集』に登場する鳥たち
(宮沢賢治学会イーハトーブセンター『春と修羅』第二集 研究』思潮社、平成 10 年)
- ③ 杉浦嘉雄『銀河鉄道の夜』に潜む多様な南中現象を解明する試み
(宮沢賢治学会イーハトーブセンター『宮沢賢治研究 Annual』Vol. 12 平成 14 年)

【報告】

第 16 回エコクリティシズム研究会 に参加して

中垣 恒太郎(常磐大学)

広島大学の伊藤詔子先生主宰による、ASLE 分科会組織の一つでもあるエコクリティシズム研究会が、2005 年 8 月 12 日に開催されました。私も含めて、近年では遠隔地からの参加者も多くなる一方でとても盛り上がっています。プログラムの詳細はすでに、ASLE「ニューズレター」18 号に掲載されている通りですが、「作品講読」、「シンポジウム」、「批評研究」の 3 部構成で丸一日、(共通の講読テキストだけでも 6 冊!)、充実した研究発表を楽しむことができました。当研究会では予め、テキスト毎に担当責任者を決め、1 年間の準備の成果を報告します。未訳の作品講読、エコクリティシズムの最新の研究書の報告など、情報や問題意識を共有する上で、貴重な場を提供していただいています。

今回のシンポジウムは「エコトピアとディストピア」と題し、4 人の報告者が、ユートピアとネイチャー・ライティング／エコクリティシズム研究への接続の可能性を探りました。元々は昨年度に「作品講読」として採り上げられた、カレンバックの SF 小説『エコトピア』(1975)およびその続編小説 (*Ecotopia Emerging*, 1981)を手がかりに、アメリカ文学におけるユートピア・エコロジーの系譜をたどることはどこまで可能であるのかという問いから、このシンポジウムは出発しました。私、中垣が序論として、「19 世紀末ユートピア／ディストピア小説におけるネイチャー」と題し、エドワード・ベラミーに代表される 19 世紀末のユートピア／ディストピア小説における未来像の中に、ナショナリズム、テクノロジー、ジェンダー、多民族、都市計画、経済などの諸問題が見出せることを確認し、続いて、城戸光世氏(広島国際大)が「アメリカのユートピア運動とその文学的影響——ホーソーンを中心に」というテーマで、ホーソーン研究者の立場から作品を精読しつつ、19 世紀中葉までのアメリカ

のユートピア共同体の特徴を丁寧にまとめられました。さらに、昨年度、カレンバック作品講読を担当した塩田弘氏(福岡大)により、「エコトピア国の『ユートピア』と『ディストピア』——カレンバックのエコロジー思想」として、「エコクリティシズムで読み解く場所の幻想」の考察がなされ、松永京子氏(ネブラスカ大)により、「エコトピアはユートピア<虚構>か?——日系アメリカ作家の作品にみるエコトピアの可能性」と題し、環境的アポカリプスやエコロジカルなナラティヴを意識したデイヴィッド・マス・マスモトやルース・オゼキら日系作家の動向についての分析報告がなされました。

盛りだくさんのテーマであったために、短い時間で質疑応答が充分とれなかったのは、司会者として大いに反省すべき点でしたが、ユートピアとエコロジー思想とが不可分に結びついてアメリカ文学史の中に脈々と息づいていることを改めて認識することができました。このシンポジウムのテーマ、「ユートピアとディストピア」は引き続き、エコクリティシズム研究会からの研究共同企画として、継続される予定になっています。エコクリティシズム研究会はあらゆる学会、研究会、読書会の中でもっとも活発な会の一つに必ず数えられるはずですが、ぜひご興味のある方の新たなご参加をお待ちしております。■

【報告】

立教大学シンポジウム

「環境文学は自然を救える、のか？」
——石牟礼道子・田口ランディ・川村湊三氏
による立教大学公開講演会より——

森田系太郎(立教大学大学院)

ASLE-Japan 発行『文学と環境』の第 8 号で結城正美氏は、次のように語る。数年前、アメリカで ASLE (the Association for the Study of Literature and Environment) の L を Literature から Language に変えてはどうかという議論が起こった。その議論を通じて環境問題に取り組む上でなぜ<文学>なのかを再考させられた

と。第3回を迎えた立教大学公開講演会「環境と文学のあいだ」の根底にもこのような問いがあるに違いない。

「環境と文学のあいだ 3 ことばの力」と題された今回の講演会は、去る10月29日(土)、立教大学・野田研一氏の辞で始まった。3人の「業界人」が登場するとあって、会場は熱気に包まれた。

最初の講演は「あの」石牟礼道子氏のビデオ・インタビュー。氏は体調の関係で来京が難しく、野田氏が現地へ赴いてインタビューをしたものが放映された。内容は、今回の主題である「ことばの力」に沿った、「言葉が生まれる過程・契機」をめぐるお話であった。自らを「近代への呪術師」と名乗る氏にふさわしい、ゆっくりとした口調から紡ぎ出される思考の産物に驚嘆した聴衆も少なくないだろう。また講演の最後には、氏による『苦海浄土』第二部「神々の村」の一節の朗読を聞くことができるという幸運にも恵まれた。

次の講演者は現代文学を代表する作家、

田口ランディ氏。氏の著作には『ひかりのあめふるしま屋久島』など自然環境を扱った作品も多く、最近では「環境文学」として紹介されることもある。講演では、環境をめぐる人間中心性や標準語の政治性などが話題となった。特に後者については、石牟礼文学は「石牟礼文法」で書かれており、標準語で規定された身体では理解することができない、という明晰な分析がなされた。

最後に登場したのは当代随一の文芸評論家であり、法政大学教授の川村湊氏。氏は石牟礼氏と田口氏の作品の分析をもとに、ことばの力の両義性、つまり「暴力性」と「正義性」を提示。そしてこの「暴力性」と「正義性」が闘争を行うのが言語表現の世界であるが、「正義性」は「物を変える力」を有しており、それが文学言語への希望に繋がる、という文芸評論家らしい「時代の読み」をまじえた結論であった。

「環境文学は自然を救えるのか？」本講演会は私がいつも抱いているこの問いに少し答えてくれたような気がする。



『Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald』 アルブレヒト・レーマン著、Rowolt社、1999年
(識名・大淵訳『森のフォークロア—ドイツ人の自然観と森林文化』[法政大学出版局]、2005)

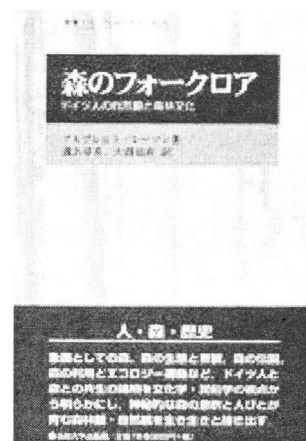
岩井洋(酪農学園大学)

ハンブルク大学民俗学教授アルブレヒト・レーマン著「Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald」(1999年Rowolt社発刊)は、「現代における森に対する意識と森林利用」というテーマでの聞き取り調査をベースに、現代にまで至るドイツ森林文化史論を語るものである。

ドイツの森の文化史はイデオロギーの歴史でもある。まず産業革命以前の前近代では、聖霊や森の住民や、動物や人間の姿をしたデーモンが森に棲むことは自明とされていた。森をニューメナス(神靈的)な非日常的空間とするこの感情は、今でも基本的には生き続けている。

樹木信仰・アニミズムはやがて一神教のキリスト教に排除されていく。しかしキリスト教の広がりや異教の閉鎖的思考とは重なっており、両者は決して対立的ではないとレーマンは言う。レーマンのこの提起は、両者を対立的に捉えるあのリン・ホワイトのテーゼと対立し、論者にとって非常に啓発的である。19世紀にハインリヒ・リールが、森の政治的・国民主義的イデオロギーを初めて意識的に打ち立て、森をドイツ民族の精神的紐帯とするプロパガンダを盛んにおこなった。

森を政治イデオロギー化するリールの考えは、ナチス時代到来の中で具体性をより増してゆく。第二次世界大戦前には、とくにオークの木や菩提樹を「ヒットラーの木」としてそれらの単一植林が盛んに行なわれ、それらの木にゲルマン民族の千年王国を希求させた。樹木の永続性ゆえに、ナチスは森の保護を盛んに行なうとともに、鉤十字型の森の造林や、鉤十字図形を森に作り上げることもした。森をドイツ民族のアイデンティティーとするこうした意識は、ドイツ的精神の底流に一良かれ悪しか



れ—今でも濃厚に存続している。

環境保全イデオロギー隆盛の前時代、1979年ドイツの二つの文化財、森の死とケルン大聖堂の激しい劣化とが大きく報道された。森の死は、世界規模の環境破壊を事実として示し、環境破壊ないしは地球破壊についての黙示録的確信を人々に与えることになった。森の死は環境保全に向けた市民意識を高揚させ、環境イデオロギーの時代を切り拓くことになる。

さらに現代では、森の多種多様な「新たな異教徒たち」がいる。彼らは森に対する神秘的で汎神論的アニミズムの信仰を抱いている。彼らは、森で動物・植物と対等に暮らすことをあこがれてさえる。

森のこのようなイデオロギー的裁断の一方で、レーマンは、人間心理に対する森の影響から森の一悪的善の一利用について論じる。

「視覚の動物」である人間は森の中では方向感覚を失い、拠り所のなさを覚えて不安を感じることが多い。そうした感覚が森を悪所とさせる。地下壕、塹壕、弾薬工場や防空壕など戦時中の、森の大量盗伐といった第二次大戦後のいまわしい記憶、敵兵虐殺やナチ時代の「地下壕の森」伝説など、森は悪しき記憶が漂う不気味な空間でもある。また、東西対立の時代に国境を越えてくる無防備な人々に対する犯罪行為が森で頻発したり、森が犯罪者の住家となったり、残虐な殺人事件が森の中で起こる。森が、チェルノブイリ事故によるプルトニウム汚染の危険な場となったことも記憶に新しい。つまり森は見通しの効かぬ空間ゆえに、各時代の社会の諸々の否定的かつ忌むべき現実が集約化される傾向にある。

しかし、森は人の心に明るく快適な爽快感を与えてもくれる。森が最も明るく魅力的な顔になるのは、晩春か夏の日の出頃である。小鳥のさえずりがその際に大いに影響を与える。また、ドイツ全体の森はドイツウヒの単一林がその半分を占めているが、その一方の広葉樹の森には多くの鳥が棲む。鹿・猪など大きな動物との出会いは、森を好む人々の冒険心をかりたてる。

深い森の中での方向感覚の喪失はヘンゼルとグレーテルの物語のトポスとなっているが、むしろ今やそこにこそ人々は静寂と孤独の快さを求める傾向にある。非日常的静寂こそが、安らぎと安心感を与える時代になっている。レクリエーションの場であり、市民生活から離れた非日常の遊びの場という認識が、森利用の主流になっている。

以上がレーマンの語るドイツ森林文化史論の概要である。

レーマンの語りのなかに反映されているのは、豊かな存在感を示す森をよりよく理解し利用しようとする国民的意識である。

日本社会の傾向とは逆に、「大いなる田舎の国」ドイツにおいて、今や人々は、都市を逃れて自然豊かな郊外や山奥に移り住む傾向にある。彼らは森へとますます近づいてきている。一方日本人は花鳥風月型の自然観を抱き、自然そして森と精神的に一体化し、具体的現実的には森から離れる傾向にある。そのような日本の傾向とは対極の、事実存在として「そこ(da)」で十全たる存在感を示している森に近づき、その森を可能な限り客観的に把握しようとする傾向、真の自然愛好国民ドイツ人の自然に対する率直な正しいまなざしと感性に、レーマンの語りは満ちている。ドイツトゥーム(Deutschtum ドイツ的なもの)のなかにある森の存在の確固たる重みが、この本をとおして強く感じられる。

『語りべの海』 森崎和江著 (ASLE-Japan/文学・環境学会会員) 岩波書店、2006年

小谷一明

安曇族、鐘崎海人族といった海を歩く人たちは、古くから大切な情報を口伝してきた。森崎氏は古文書、郷土資料から漁民の手書きメモまで渉猟しつつ、宗像七浦周辺で聞き書きを続け、声の文化(読み書きとは異なる文化)、そのコミュニケーションが育む「いのち」の思想を紹介し続けている。

本書は漁業組合長高崎氏と娘の祐美子氏との交流録を中心に、しいら漬・棒受けといった漁法、石波止・山あてといった漁村環境の形成、漁業組合の苦境が対話形式で語られていく。さらに朝鮮通信使の日韓共同研究、愛光園との市民交流、花田俊典の天逝など多岐にわたる話題が積み重ねられていく。なかでも海辺のホテルや公園建設、市町村合併といった加速



日本探しの旅は、生き直しの旅



する「文化発展経済発展の毒素」にたいし、海辺の来歴と交流の豊かさを知る森崎さんは静かに言葉をかさねていく。それはどんなに異質なモノ(軍事基地、石油備蓄基地など)をも受け入れてきた宗像七浦に敬意を払うことから始められている。題名にもあるように、語りべの海にまず耳を澄ませることが毒素にたいして取られている姿勢である。「和ちゃんさわやかに立ちなさい/あなたへ 今の肉体をあずけます/庭に一声 虫の声/つづいて一声 蟬の声」。声なき他者からの呼びかけを聞くことは、海をわたるトンボに目を向け、押し寄せる巨大クラゲに苦慮することにもつながる。最後に森崎氏は「明日への責務へと果てなさい」と自らを律しているが、次世代がこの社会思想を引き継ぐことができるのかという命題のほうが重くのしかかっているように感じられた。

『場所を生きる』 山里勝己著 (ASLE-Japan/文学・環境学会会員) 山と溪谷社、2006年

小谷一明

本書の特徴は第1章から、批評空間に多くのストーリーを交差させていく点にある。このストーリーの豊富さは、研究を多様な時空間にさらし批評性を見極めていく実践の足跡であり、ここから半世紀にわたるゲーリー・スナイダーの創作活動における現代的意義が俯瞰されることになる。

第1章では20世紀における「見る主体」の変化を批評の基軸に据えている。20世紀が視覚の世紀であることは、映像の時代として始まり現在のネット空間を考えれば納得のいくことである。山里氏はこの視覚・眼差しの世紀を、自我の屹立という思想から、相互依存の思想へと推移した世紀とも指定する。つまり私小説に顕著である内的葛藤を経た近代的自我の確立、それを励行する個人主義の思想が、間主観的な相関性を重んじる思潮へと変容した時代と語る。こうした変容が地域主義やナショナリズムを越える、生態学的な、ポスト植民地主義的な視点とともに語られるようになり、人間・非人間といった枠組みを脱臼させる思索へと向かったと論じられる。



この議論が示唆的である理由は、2章の「銃を持って森に消えた詩人」、ギンズバーグの葬儀における参加人数といった具体的事例の証左にある。これまでの近代文学においては、近代的な自己形成に懊悩するプロセスを描く作品がキャンソンの中心として選定されてきた。この内的葛藤を経験する近代人表象が、ある他者をその葛藤経験を持たない者として作為的に徴づけることになる。さらにヒューマン・ノンヒューマンの区別、地域間における主従の関係を作り出し、キャンソン文学が植民地主義や文化帝国主義の下支えとなった。この意味における近代文学の終焉が、生命の躍動を讃えるギンズバーグの葬儀における参加人数において示され、同時に「銃を持って森に消えた詩人」、パム・アカデミー(乞食学院)を連ねる文学的系譜が浮上する可能性を山里氏は見取っている。そのためスナイダー批評は、文学史のエッジ(前衛と周縁)が紡ぎだす文化的混交性や、「生命の共同体」といった思索を前景化していく。スナイダー自身の伝記も多くの接点・視点から、例えば日本における修験道との関わり、サンフランシスコの情報を「部族」に持ち込む役割、改造社や山

谷と関わるナナオ・サカキとの交流などの点から語られていく。こうしてスナイダーの詩と宮沢賢治の詩に関しても、金関寿夫とは異なる解釈が生まれてくる。

批評家である山里氏自身も、詩人スナイダーにとっての大きな接面の1つである。これを前提にした批評が、自らを書き込むというスタイルを採用するのは当然のことである。スナイダーの妻であったマサさんと話し、マサさんが那覇市長の瀬長亀次郎と縁戚関係にあることを知る。スナイダーに『新沖縄文学』の琉球共和国憲法について話す。スナイダーが宮古の漁師の言葉を口ずさむ。こうしたコミュニケーションの結晶が、最後に収められた創作的な「スナイダー訪問記」である。

山里 こんな風の声はどこかで聞いたことがある。どこで聞いたのだろう。

スナイダー 生まれる前かな(笑い)。

山里 たぶん……。

この最終章へと読み進めるまでに、私はこのような回想録が書かれていることを心より期待した。それは環境ディスコースの集約とも思える『終わりなき山河』の精緻な分析においてさえ、筆者の多彩な表現力と柔らかな文体に魅了されていたからである。そして詩人スナイダーの内質、その「無性」(ノーネイチャー:規定されない自然・性質)たる想像領域は、山里氏の筆致により鮮明に立ち現れることとなった。

これ以外にも本書には、荒れ野と自己省察の関係、ビート文学の移動と「場所の感覚」の違和といった主題が、詩および詩人を理解するための豊富なテキスト資料とエピソードを交えて論じられる。またインタビューや多くの写真(特に山里氏に悪戯っぽい眼差しを送るスナイダーが印象的であった)を挿入する構成も魅力的である。最後に個人的な印象であるが、スナイダーについての思索が、場所について長く深い苦悩を余儀なくされている沖縄の思索と呼応しているように感じられた。山里氏のローカリティをめぐる思索は、無性たる想像領域の回復を賭したものではなかっただろうか。

書誌情報

ポール・ブルックス 上遠恵子・北沢久美訳『自然保護の夜明けーデイヴィッド・ソローからレイチェル・カーソンへ』(新思索社、2006) ■ネイチャーライティング研究では定評のある書がようやく翻訳された。カーソンがネイチャーライティングの伝統にいることを指摘した、カーソン研究にとっても重要な書である。(上岡)

武藤脩二・入子文子編『視覚のアメリカ・ルネサンス』(世界思想社、2006) ■アメリカ・ルネサンス期前後の作家たちと視覚芸術との関係を扱った論集。会員(巽孝之、伊藤詔子、野田研一、城戸光世)の論考にはネイチャーライティングの視点も生かされている。(上岡)

高田賢一編『若草物語』(ミネルヴァ書房、2006) ■「シリーズもっと知りたい名作の世界」の第一巻。写真・図版を多用して名作の世界を現代の視点から再考する「いま必要なガイドブック」。会員(高田賢一、成田雅彦)の論考がある。(上岡)

上岡克己・高橋勤編『ウォールデン』(ミネルヴァ書房、2006) ■「シリーズもっと知りたい名作の世界」の第三巻。会員(伊藤詔子、稲本正、上岡克己、高橋勤、小野和人、岡島成行、山里勝己、野田研一、巽孝之)の論考がある。(上岡)

ナサニエル・ホーソーン 斎藤昇訳『わが旧牧師館の小径』(平凡社ライブラリー、2005) ■エマソン、ソローの回想とともにコンコードの四季を綴った随想。訳者によれば、「環境文学の視座で読めば、紛れもなく诗情溢れる豊かな自然を表象したネイチャーライティング」となる。(上岡)

上田和夫・渡辺利雄・海老根宏編『20世紀英語文学辞典』(研究社、2005) ■ネイチャーライティング関係の記述も充実している、20世紀英語圏の文学辞典。(上岡)

< ASLE-Japan 日韓合同シンポジウムに関する報告 > (小谷)

2006年3月に韓国ソウル市で2007年度ASLE-Japan日韓合同シンポジウムの協議が行われました。そこで野田先生、アレン先生がゲスト・スピーチを行い、教員及び大学生、大学院生をまじえて環境批評についての意見交換を行いました。小谷からはシンポジウムで行うワークショップのために、共通テキストを選定していくことについての告知がなされました。以下が、ASLE-Koreaの方々と協議した内容をアレン先生、野田先生に修正・加筆をして頂いた報告になります。なお以下の検討はあくまで2006年3月時点のものであり、この内容をもとに更なる話し合いが日韓の間で現在も続いております。

ASLE 日韓合同シンポジウムに関する検討内容

(以下、敬称略)

す。

*文化系と理科系の環境研究の橋渡しは可能か?

日時:2006年3月27日(月) 17:00-20:00

場所:ソウル市 成均館大学

出席者:約20名

ASLE-J 出席者:野田研一、ブルース・アレン、小谷一明

ASLE-K 出席者:

Moonsu Shin(ソウル国立大学)

現アズリー・コリア会長

Soong-Won Lee(ソウル女子大学)初代会長

Kang Seok Chu

Dooho Shin(三陟国立大学)

Simon C. Estok(Konkuk University)

Won-Chung Kim(成均館大学)

Gyu Han Kang(国民大学)

Chug Ho Chung(中央大学)

他 約10名

配布資料:* 日韓合同シンポジウム趣意書

ASLE Japan-Korea Joint Symposium「Place, Nature, Language—Thinking about “Now” in Japanese and Korean Environmental Literature」(13. March 2006)

* ASLE-Japan パンフレット

* ASLE-Japan 2005 年度会誌(1冊)

1. スピーチおよび告知

- ① 基調講演 野田研一 初代 ASLE-Japan 文学・環境学会代表

『環境文学研究(Environmental Criticism)と ASLE-Japan』

- ② 講演 ブルース・アレン

『韓国再訪—文学を取り巻く現状』

- ③ 告知 小谷一明

「合同シンポジウムに向けて—研究会における図書の選定について」

- ④ 質疑応答

* 'environmental criticism' という Laurence Buell の用語の妥当性について

* 共通テキストとして Won-Chung Kim 氏の著書を推

2. 合同シンポジウムの準備に関する審議

① テーマと運営

* 大会テーマのサブタイトルについて議論した。つまりタイトルに「日韓」を入れると他を排除するのではないかという意見があった。しかし、ASLE としての協力関係をまず重視するため、また将来への一歩を築くため、まず日韓を明確にする

* ただし、開催告知は世界中の ASLE、あるいは、環境文学研究者に、日本文学・韓国文学研究者に向けて行う(費用のサポートは不可、言語は日本語、韓国語、英語のみ)

* 韓国側窓口として、2~3名の運営実行委員を選出する
* 今後2年ごとに、あるいは数年ごとに日韓開催を行い、この協力関係を継続することを提案し同意を得た

② 開催時期・開催地・スケジュール

* 韓国は3月1日から前期、9月1日から後期開始であるため、開催日程を少し調整する

* 金沢大学での開催予定を伝えた

* 概ねスケジュール通り、特に異論は出されなかった

③ ワークショップ・フォーマット

* 招聘研究者10人の内訳を韓国文学者5人、英米文学者5人としたという韓国側の要望あり

* 応募論文の査読に関し、韓国側はほぼ全員が招聘研究者に該当するため査読の必要がないとの意見があった

④ 共通テキストにおける議論

* Won-Chung Kim 教授訳3人の環境詩人詩選集(英語訳)が紹介された。

タイトル:“Cracking the Shell—Three Korean Eco-poets Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong.” Translated by Won-Chung Kim. (Homa & Sekey Books) が紹介された

* 今後、運営実行委員間でリストアップ作業を進める

⑤ 使用言語の問題に関して

* 使用言語は基本的には日本語、韓国語、英語

- * シンポジウム開催時は各言語の通訳をつける
- * 事前に提出された論文は、日本語は英語と韓国語に、韓国語は日本語と英語に、英語は日本語と韓国語に翻訳する
- * 参加者は事前に翻訳された論文を読んでおく

⑥ 渡航費用・宿泊費用について

- * 10人分の滞在費用を支払う
- * 食事、国内旅費、シンポジウムの登録料10,000円は含まない
- * 今後取れる補助金額によると重ねて伝えた

3. 合同シンポジウムに向けた韓国文学の研究会

- ① 研究会テキスト選定は今後の課題
- ② 英訳、日訳された韓国文学の情報については、今後選出される韓国側の運営実行委員の協力のもとにリストアップする
- ③ 英訳、韓国語訳された日本文学の情報については、韓国文学研究会を中心にリストアップする

4. その他

ASLE-K 会誌 “Environment and Literature” 第4号(2005年4月)

上記雑誌の寄贈を受けた。以下その目次の紹介: 論文(巻頭論文を除き著者名省略)

- (1) American Nature Writing as a Genre [Shin, Moonsu 著]
- (2) A Study on the ‘Sea’ of Shimchong-geon from the Perspective of Life
- (3) The Ecological Paradigm of a Community Preserving the Lives Enjoying Themselves
- (4) A Study on the Tree in the Korean-novel
- (5) A Religious Interpretation of Nature in the 17th

Century America

- (6) The Meaning of Natural Life Presented in Hyo-seok Yi’s Short Stories
- (7) After Green Rush: The Development of Thoreau Studies in Korean and Rethinking the Deconstructive Reading of “Walden”

書評 J. Scott Bryson ed. *Ecopoetry: A Critical Introduction* 他

報告 2005年 Women’s Worlds 報告、アズリー2005・オレゴン州ユージーン大会報告他

ホームページ <http://www.aslekorea.org/>

<全国大会のテキストについてのお知らせ> (小谷)

本年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会(2006年9月9日~11日、仙台)にて、以下のテキストを用いてワークショップを行う予定であります。使用するテキストは韓国環境詩人3人を紹介した詩集となります。

翻訳者 Won-Chung Kim 他

タイトル *Cracking the Shell: Three Korean Ecopoets — Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong*

出版年月 2005年 出版社 Homa & Sekey Books
ISBN: 1931907404

ワークショップでは、作品について皆さまと意見交換をしていきたいと考えております。是非、本書を購入の上ご参加ください。なお2006年6月現在、アマゾン・ドット・コム(米国)においては購入できますが、日本のアマゾンでは注文できない模様です。

また2007年度日韓国際シンポジウムにおいても、本書は共通テキストの一つに取り上げられる予定となっております。

事務局より

2006 年度は新しい会員名簿を発行する年になっております。会員の皆様におかれましては、名簿記載事項に変更がありましたら下記の事務局補佐まで 7 月末ごろまでにお知らせ下さいますようお願いいたします。

ASLE-Japan/ 文学・環境学会事務局補佐:

903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1、琉球大学法文学部 喜納育江

Tel & Fax: (098) 895-8291 Email: ikuekina@LL.u-ryukyu.ac.jp

◆会費納入のお願い

会費未納入の方は、至急、下記郵便口座へお振込ください。(一般 5,000 円、学生 2,000 円)

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

なお、前年度までの会費をお納めいただけていない方には、既に督促状をお送りしました。その後速やかに会費を納めてくださった方々に対し、ご協力に感謝します。しかしながら、会費を納めいただけたにもかかわらず、振込金額が未納分に満たないために未だに滞納状態にある方もいらっしゃいます。会費納入の際には、当該年度までのお振込をお願いいたします。

◆2006 年度全国大会を仙台で開催します

とき：2006 年 9 月 9 日（土）～11 日（月）

ところ：東北大学（宮城県仙台市）

大会実行委員長：東北大学国際文化研究科 石幡直樹

伊藤詔子氏、ASLE-US の名誉会員に

このたび伊藤氏は長年の功績により ASLE-US から名誉会員の称号を授与された。これまでの名誉会員は、E.O.Wilson, Scott Slovic, Annette Kolodny, Homer and Betty Aridjis, Leo Marx, John Elder である。

【編集後記】編集委員長の 4 年の任期がやっと終わりました。在任中お忙しい中、原稿をお寄せくださった方、また読んで意見を下さった方にお礼申し上げます。若手の編集委員二人には本当にお世話になりました。今後ともニューズレターのご愛読をよろしく願います。(K)



【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会
代表 生田省悟
事務局：金沢大学外国語教育研究センター
結城研究室内
〒920-1192 金沢市角間町
Tel: 076-264-5819, Fax: 076-264-5993
E-mail: yuki@ge.kanazawa-u.ac.jp

【編集】

編集代表 上岡克己
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
高知大学人文学部
TEL: 088-844-8197
FAX: 088-844-8249
E-mail: kamioka@cc.kochi-u.ac.jp